

トルコにおける国民国家形成と 人口センサス事業

加藤 博
穂山祐子

目 次

1. はじめに
2. 問題設定
3. 布告に見る人口センサスの目的
4. 人口センサス実施による国民の「掌握」と「統合」
5. 国家認知と人口センサス：対外的機能と外国人専門家の役割
6. 小括

1. はじめに

19世紀から20世紀初頭にかけて、非ヨーロッパ世界は国民国家群として編成される過程にあった。それはヨーロッパ列強からの強い外圧のなかで、ヨーロッパの国家をモデルにしたものであった。そのため、国民国家はまずヨーロッパに成立し、次いでそれが非ヨーロッパ世界に伝播したと考えられがちである。

しかし、ヨーロッパ世界も非ヨーロッパ世界も一律ではなく、国民国家の建設も地域・国家ごとにタイムラグを伴ったものであった。と同時に、近代という時代は、ヨーロッパ世界と非ヨーロッパ世界とが密に関係し合うようになる時代でもある。その結果、ある地政学的状況の下では、国民国家建設において、一部の非ヨーロッパ国がヨーロッパ国に先行するという事態も生じた。

たとえば、地中海を挟んだ19世紀のヨーロッパ世界とイスラム世界を

見てみよう。イスラム世界では、オスマン帝国はすでに18世紀の後半から近代国家への脱皮を試みていた。また、その属州であったエジプトでは19世紀前半において、非ヨーロッパ世界で最も早い近代国家建設の試みがなされた⁽¹⁾。

これに対して、ヨーロッパ世界では、イタリアのリソルジメント（イタリア統一運動）の終結が1861年、プロイセンを中心にドイツ帝国という形でドイツが統一されたのが1871年である。つまり、国民国家の形成は地中海の北と南で同時並行的に進行していたのであり、この点において、ヨーロッパ世界とイスラム世界とで、基本的な政治状況の違いはなかった。

ところで、国民国家の運営にとって、統計の整備は不可欠である。それが国民に対する直接的な管理を可能にし、国家を単位とした経済運営の基礎となるからである。そのなかでも、人口統計の収集は最初に実施すべき事業であった。とともに、それは国民国家を作り出す手段でもあった。国家（ステイツ）の単位となる「国民」（ネイション）は創り出されるものだからである。

この点において、イスラム世界での「国民」の創出は容易ではなかった。国民国家はそれまでのイスラム統治システムの解体の上で形成されねばならなかったが、伝統的なイスラム統治システムと国民国家システムはまったく異なる特徴をもっていたからである。

伝統的なイスラム統治システムにおいては、領土は前提とされず、住民は宗教・宗派を単位にして間接的に支配された。これに対して、国民国家体制では領土を前提にした国家（ステイツ）の枠組みのなかで、住民は宗教・宗派に関係なく、言語の共有からなる民族（ネイション）の一員として直接的な支配の対象となる。つまり、住民支配の単位が宗教であるか世俗的な民族であるか、固有の領土を前提にするか否か、住民支配が間接的であるか直接的であるかの点で、正反対であった⁽²⁾。

(1) 加藤 (2013)

前近代から近代への統治システムの移行が困難な過程であったことは、ヨーロッパ世界でも同じであった。しかし、ヨーロッパ世界では、この移行は自らの歴史のなかで成し遂げられた。しかし、イスラム世界では、それは住民の生活とは関係なく、国際政治の力学のなかで、上から強要されたものであった。この結果、この統治システムの移行の影響は政治にとどまらず、住民の歴史的な生活圏が破壊されることによって、住民の生活全般にまで及んだ。

こうして、「国民」を創出する手段であった人口センサス事業には、国民国家形成にまつわる問題群が集約された形で示されている。その射程は、イスラム世界での国民国家形成をこえて、国民国家一般の形成にもなう問題群にまで及んでいる。本稿は、19世紀の近代になってもイランを除く中東のほぼ全域を支配していたオスマン帝国が帝国からトルコ共和国へと移行する過程を取り上げ、トルコの国民国家形成における人口センサス事業の意義づけを行うことを目的とする⁽³⁾。

2. 問題設定

統計への関心は、近代の国民国家においてのみ見られるものではない。前近代の政治主体も、その統治に統計を用いた。しかし、そこでの統計

(2) 鈴木 (1993)

(3) 本稿は、筆者たちが参加した一橋大学 G-COE 形成プログラム『アジア長期経済統計プロジェクト』(1995年度-2000年度)における成果の一部である。このプロジェクトでは、「西アジア」としてトルコとエジプトが取り上げられ、人口を始めとした各種社会経済統計が収集された。現在、その分析がなされている。本稿は、そのうちトルコの統計制度、人口統計に関する分析に基づいている。エジプトについての同テーマでの考察は稿を改めて論じるが、関係する文献として、とりあえずは〔加藤 2003〕を参照のこと。なお、本稿の構想については筆者二人の意見交換に基づいているが、3節から5節までの実証的な部分の執筆は穂山によってなされた。

——ここでは、それを近代統計に対して、前近代統計と呼ぼう——は、国民国家が整備した近代統計とは大きく性格を異にしている。

前近代統計は、特定の目的に沿って収集された。その主たる目的は徴税と徴兵であった。目的と直接に関係しない統計は、収集されなかった。そのため、たとえば土地税関係の統計において、課税額だけが記され、課税地の面積が表記されないというような、近代統計では考えられないような関連数値の欠落が生じた⁽⁴⁾。かかる事態は、技術的な統計制度の不備によるものではなく、徴税という目的に対して、課税地の面積という数値が当局の関心の外にあり、それを収集しようという意図がなかったからである。

これに対して、近代統計では直接には特定の目的を持たない場合でも、網羅的で体系的な数値が収集された。それは、国民国家にとって統計とは、個々の政策を達成するため以上に、国民管理の根幹にある「思想」だったからである。この「思想」を最も典型的に示しているのが人口センサスである。近代における人口調査は、統治する社会を監視することを目的としたという点において、徴税や徴兵に関係する人口の数値を集めるにとどまる前近代の人口調査とは本質的に異なる。ここでは、前近代統計の性格をもつ人口統計の収集事業を人口調査と呼び、国民国家による近代統計の性格をもつ人口統計の収集事業を人口センサスと区別しよう。

人口センサスがどのように定義され、研究されてきたかを少し振り返ってみよう。Starrによれば、人口センサスは、徴税や徴兵といった具体的な目的を超えて、国家あるいはある領域内の全人口をカウントすること、調査および記録の単位が個人であること、調査が決められた時間内で行われること、データの刊行が前提とされることという性格を持つ⁽⁵⁾。また、安元は、同一調査票の使用、確定された調査領域などが保証する調査の均質性や、調査が定期的に行われる継続性を人口センサスの要件に数えてい

(4) 加藤 (2003)

(5) Starr (1983) p. 11.

る⁽⁶⁾。

こうした性質をそなえた人口センサスは18世紀ごろ出現し、19世紀にはヨーロッパおよび新世界の国家システムの中に定着していった⁽⁷⁾。ヨーロッパにおける普及の背景には、労働人口の管理や適切な福祉政策を実施するために、出生率や死亡率といった人口学的なデータを用いて、国民の身体の状態が求められてきたことなどが指摘される⁽⁸⁾。この一方で人口センサスは、人々の「数値化」と「分類」によって社会を目に見えるものにするというその特徴から、帝国主義国家が効率的な植民地統治を行うための情報収集手段としての役割を担うことにもなった⁽⁹⁾。

ところで、本稿で取り上げるトルコでは、人口センサスは帝国から国民国家への移行という統治システムの大転換を経て導入された。もともと、オスマン帝国では、課税を目的とし世帯単位で行われてきた旧来の人口調査は、19世紀においてすでに「個」を測るものへと転換しており、1881-93年に行われた人口調査では、その目的は徴税や徴兵から脱皮し、調査単位も年齢や性別にかかわらずすべての個人となっていた⁽¹⁰⁾。

(6) 安元 (2007) IX 頁

(7) 最初の人口センサスがいつなされたのかについての見解は研究者により異なる。中央政府による全国規模の本格的な人口センサスがスカンディナヴィア諸国で始まったとするものもあれば (安元 (2007) 93 頁, Starr (1983) p.12.), 一定の基準を満たし、標準的かつその後定期的に行われたという点から、国家による近代的人口センサスの開始は1790年のアメリカによる人口センサスであるとみるのが妥当とするものもある (Kertzer & Arel (2002) p.7. アンダーソン (2005) 56 頁)

(8) フーコー (2006) 266-271 頁

(9) Appadurai (1993) pp.314-340. Scott (1998) p.65. アンダーソン (2007) 277-282 頁

(10) Shaw (1978) p.330. オスマン期の統計システムは、課税のための検地および人頭税把握のための非ムスリム調査を基礎として開始された。こうした調査が個人の把握と言う性質を持った人口調査へと転換したのが近代化改革を背景とした1881年の徴兵可能な男性人口に対する静態調査であっ

したがって、人口センサスの萌芽は、19世紀中葉の近代化改革（タンズイマート）期に既に見られたともいえる。しかし、McCarthyの指摘にもあるように、オスマン帝国末期の人口調査は、国土の全人口を一定の期間内に測り、なおかつそれを定期的に行う静態調査ではなく、実質的には人口登録に過ぎなかった⁽¹¹⁾。トルコでの人口センサスの開始は、共和国成立後、1927年を待たなければならない。

それでは、トルコ共和国で人口センサスは、いかなる関心のもとに実施され、それが担った役割はどのようなものであったのだろうか。そして、列強による植民地化を免れて歩き出したばかりのトルコ共和国が抱えた独自の事情は、人口センサスの実施実態、あるいは統計制度一般の特徴にどのように反映しているのだろうか。トルコにおける人口センサス導入事情の検討は、西欧の統治技術である人口センサスが後発国民国家一般にとってどのような意味を持っていたのかという考察に対して、多くの知見を与えてくれる。

トルコ共和国の人口センサス事業に関わる研究としては、民族問題やナショナリズムの議論と絡めて収集データの内容に言及している Çağaptay (2006)、マイノリティに関するデータを特定の項目ごとにまとめ、その変遷を観察した Dündar (1999) などがあげられる。人口センサスの導入や実施の意味合いに焦点を当てたいいくつかの研究のうち、国民国家建設の過程での人口センサスの役割を当時の世論から紐解いた Tamer&Bozbeyoğlu

た。この調査は Karal (1943) の研究によってオスマン帝国における初めての人口センサスと位置づけられて以来、様々な研究の中で慣例的に「センサス」と呼ばれてきた。事実、この調査は検地とは無関係であり、世帯単位でなされてきた調査が個人を対象にして行われた点のほか、中央集権的な人口登録システムの基礎を作り上げたという点においてそれ以前の調査とは異なる。Behar はオスマン期の人口統計を 15-18 世紀までと、1830 年頃以降に大きく区分できるとしている。Behar (1996) p. XVII.

(11) McCarthy (1983) p. 164.

(2004), 人口増加政策の土台としての人口センサスの意義について取り上げた Çakmak (2009) は, 本研究と関心が部分的に重なる.

しかし, 共和国政府が意図した人口調査の目的を, 布告や宣伝活動の内容に踏み込んで検討したものは見当たらない. また, 統計組織の内情や調査手法をめぐる考察が十分になされてきたとは言えない. このような状況を踏まえて本稿では, トルコにおける人口センサス導入期として, 1926年の統計局成立以降, 2度の調査が行われた約10年間を設定し, 人口センサス事業が国民国家形成プロセスにおいてどのように位置づけられていたかを検討する.

次節ではまず, 調査にあたって共和国政府から出された布告と通達を手がかりに, 人口センサスの実施がいかなる問題意識の下で行われようとしたのかを探ってみたい.

3. 布告に見る人口センサスの目的

以下は, 1927年人口センサスの準備段階において中央統計局から出された「県知事に対する第一通達」の中で, 人口センサスの目的と効果として述べられている一節である.

国家統治に関係するすべての個人について, 正しい情報を入手する必要性は日々痛感されている. そもそも, 力の根源と不足を知らずにひとつの国家を完璧に管理することは困難である. 人口は国家の第一の要素であり, すべての力の主要な源である. (……) しかし, 発達した管理制度のために必要な情報はいまだに入手されぬままである. この点において, 我々が持つ情報は, 何年も前に不完全な方法で取得された推算以外の何ものでもない. 先の戦争と(列強の)干渉の結果, 祖国の境界は変化し, 住民交換が行われた. つまり, いまだ人口の総数に関してすらはっきりした情報がない. センサスの目的は我々をこ

うした人口に関する知識が不足した状況から救い、大きな齟齬を含む不明瞭な推算の代わりに、明瞭で確実な情報を作成することである⁽¹²⁾。

ここには、オスマン帝国期の人口情報はもはや価値を失っていること、トルコ共和国成立後も国力の源である人口の正確な数が把握されていないことに対する率直な危機感が綴られている。トルコは建国に際して、オスマン帝国末期から途切れる事なく続いていた戦争と国境線の変化、そして、それによって引き起こされた大規模な人口変動を経験した。こうした状況が、人口の数的把握とその地理的分布を把握するための公的な調査を必要とさせたのである。

もうひとつ、1927年人口センサス実施前に首相のイスマット（イノニユ）の名前でも出された「人口センサスに関するトルコ人民への布告」の内容を確認してみよう。布告ではトルコ領内の全人口が調査されることが宣言され、これを行う理由について語られている。

（……）人口数を正しく知ることは、すべての組織活動の核と基礎を作り上げる。人口センサスはこの国の物質的、精神的な向上と進歩のために、人口の密度と質に鑑みた適切な解決法を選ぶにあたって、国家にとって最も価値ある案内書となる⁽¹³⁾。

続いて、調査は政府組織の適切な管理・運営のため使用する情報の欠如を埋めるために行われるもので、ここから最も利益を得るのは人民であることが強調される。さらに、国家構築のための人口センサスの役割についての言及が続くが、ここには県知事への通達とは若干色合いの異なる表現

(12) Başvekalet İstatistik Umum Müdürlüğü (1929) p. 97.

(13) Ibid., p. 117.

が現れる。

(……) 我ら国民の勇敢さと犠牲精神で作上げたこの国には、いったい何人の住民がいるのだろうか。現在、そして未来の我が国の安全を支える力と豊かさはなんであろうか。我が国の国境が同胞の血と人民の祖国愛あふれる骨で作上げられたその日から、疑いなく、全トルコ国民がこの問いを発したであろう。この問いへの最も正しい答えは、人口センサスによってのみ明らかになる。同様に人口センサスは、進歩の道を手を携えて前進し、近代性を向上させるために国民が共通して持つ希望の表現となるだろう。そして、統治する者とされる者が強く結びついている姿を示すだろう。人口センサスはすべての国家にとって近代的な関心を示す道具であり、重要な進歩のうちの一つである⁽¹⁴⁾。

この後、人口センサスがよき意思と規律を持って記録されることの必要性などが説かれ、布告は以下のように締めくくられる。

(……) 文明の豊かさと進歩を高い次元に到達せしめるには、すべての物事について正しいデータを作成し、組織を作り、国民の連帯を強化することが求められる。政府が人口センサスの目的とするのも、新たなトルコの豊かさと力を認識することにより、これを文明的、先進的な諸民族のレベルに高めようとするためである。このために自由な人間である全トルコ人が、(この国の)国民であることの利益と名誉を理解し、人口センサスを正確、確実に遂行するにあたり、政府に全力で協力してくれることを願っている⁽¹⁵⁾。

(14) Ibid., p. 117.

(15) Ibid., p. 118.

進歩、文明といった言葉が繰り返されるなかで、人口センサスは近代的な国家にとって不可欠な事業であり、トルコを正しい方向に導くための「案内書」として位置づけられている。目指す地点として設定されているのは、その技術の輸入元である「文明的で先進的な諸民族」である。既に先を行く西欧諸国に向けられた視線には、西洋モデルの統治技術を受容し、過去のオスマンの伝統からの脱却を目指そうとする意識が投影されていると言える。

さらに、「統治する者とされる者を強く結びつける」「国民の連帯の強化」といった表現から明白にわかる通り、人口センサスが国民を一つにまとめるものとして認識されていることが確認できる。人々を国民として国家に結びつける事業として人口センサスを捉える姿勢は、トルコの人口センサスの実施実態にどのように反映しているのだろうか。次節では、調査の実施実態とそこで生じた問題への対処がいかになされたのかを通じて、国家行政手段としての人口センサスの重要性について考えてみよう。

4. 人口センサス実施による国民の「掌握」と「統合」

1923年の建国を経て、トルコに中央統計局が組織されたのは、1926年のことである。同年、1927年の第一回人口センサスの実施が決定された(法893号)。トルコにおける中央統計局の組織と人口センサスの早期的な実施は、一連の近代化・西欧化改革において際立った指導力を発揮したムスタファ・ケマル(アタテュルク)の存在が大きかった。中央統計局は、近代的文明国家を下支えする組織として、人口センサスという最初の大規模事業に取り組むことになる。

人口センサス実施にあたっては、まず数回の予備調査が行われた。本調査の前に全建築物に番号が振られ、すべての通りに名称が付与される。建築物は居住許可を取得しているものと、居住許可がないが住人がいるもの、それ以外の3種に分けられ、この情報をもとに、調査区の設定が行われた。

こうした作業は、治安維持とインフラの整備にも大きく寄与したものと考えられる。

そして、次になされたのが、当時の識字者の少なさ故に大きな問題となった調査員の任命であった。調査票への記入が調査員によって行われる他計式が採用されていたために、識字層の確実な動員は人口センサスの成功に関わる重大な課題であった⁽¹⁶⁾。調査員の多くは、公務員や教員を中心に任命されたが、彼らが調査に協力しないという事態も生じていた。居住区以外で調査にあたる人員には交通費が支給されるものの、謝礼は支払われなかったため、協力をさげようとするものが出たものと思われる。実際、1935年8月、中央統計局は総理府に対し、調査への職員供出を渋る政府部局に対する指導を徹底するよう書簡で求めている⁽¹⁷⁾。人々の動員をはかるために、読み書きのできるものは全てこの任務を受け負う義務があること（法2465第5項）、この任務から逃れたものについては5～25リラの罰金、調査員の任命受理を妨害したものには10～50リラの罰金が科されることが定められた（通達第8項）。

調査員の任命と同じく中央統計局の頭を悩ませたのは、被調査者である国民の非協力的な態度であった。オスマン期以来、人口調査が徴税や徴兵につながるものと捉えられてきたことで、人々は恐怖感や疑念から調査を逃れようとする傾向があった。第二回人口センサス実施5日前、1935年10月15日のZaman紙では第一回人口センサスについて以下のように言

(16) 1927年調査での調査員の数は全体で52,276名であったが、1935年センサスにおいてはその倍以上の123,045名（都市部53,003名、村落部70,042名）の調査員が任命されている。調査員の倍増は、第一回調査で生じた問題の一つが、調査員の不足であると認識されていたことの表れであるといえる。第二回センサスでは概ね200人が住むエリアを1調査区と設定し、調査区ごとに1人の調査員、4調査区に1人の監督員が派遣された。

(17) BCA.030.10.24.137. (BCA: Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi 首相府共和国公文書館資料、以下同)

及されている。

（人口センサスの）初めの一步は1927年に踏み出された。それは我々の最初の経験であり、完全な成功をみなかった。政府が誠心から調査への協力を懇願したにもかかわらず、国民は全く聞かず、見向きもせず、この調査の重要性を——哀れなトルコの民衆よ、調査の名ではただ家畜の勘定しか知らず、いつも家畜を一頭一頭数えているにもかかわらず人間については数えなかった——理解せずに、政府に十分な協力をしなかった⁽¹⁸⁾。

こうした状況を背景に、人口センサス実施のための強制力が発動された。調査当日は、朝8時から調査員が各戸を回り、直接世帯主に質問を行うが、すべての調査が終了するまで人々の外出は禁止された。国内全域で交通機関の運営が停止され、移動中の列車の乗客は最終目的地の駅で調査終了まで留め置かれた。1935年人口センサス実施時のアンカラとイスタンブルについて述べられた資料から浮き彫りになるのは「戒厳令」とも評されるその物々しい雰囲気である。

（……）（町では）時折、許可証なしに通りに出ようとするものを制止するための警官、軍警官、あるいは兵士が目に入るだけだった。町は戒厳令下にあるようであった。（中略）調査が可能な限り誤りなく行われるように、調査日には全国で外出が禁止された。家からは調査の終了を知らせる大砲の音が鳴るまでは出られないことになっていた。この終了の合図があった途端、人々はがやがやと通りに吐き出された。通りは子供たちの楽しそうな声でいっぱいになった⁽¹⁹⁾。

(18) Başvekalet İstatistik Umum Müdürlüğü (1941) pp. 267-268. 1935年10月15日 Zaman 紙より転載。

(19) Ibid., pp. 252-253. スウェーデン人統計家ブルシュヴァイラーが語った調

昨日、第二回人口センサスが実施された。イスタンブルでは朝8時に始まった調査は、17時40分に終了した。(……)この間、家から家へ動き回る調査員のほか、通りには誰も見られなかった。自動車、トラム、馬車、フェリー、船は完全に停止した⁽²⁰⁾。

このように、少なくとも都市部においては、外出禁止令がそれなりに徹底されたものであったことがわかる。調査は、こうした非日常的な空間の中で、公権力との直接的な接触として国民一人一人に経験され、さらに定期的に繰り返されることで、人々を「国民」として新たな国家システムの中に組み込むものとして機能したといえる。

もうひとつ、人々を調査に取り込むために行われたのが、様々な形でなされた宣伝活動であった。宣伝活動は、人口調査法の発布以来、新聞や雑誌への論説の掲載、統計局と教育省により作成された学校での特別教育プログラム実施、トルコ人の炉辺等組織での講演、映画館での調査宣伝の上映、ポスターの貼付といった手段を用い、全国的に展開された。第二回人口センサス実施時から、ラジオ放送を用いた宣伝活動が始まっている⁽²¹⁾。第二回人口センサス3日前にイスタンブルラジオで放送された「人口センサスの重要性」というラジオ講演会はその典型的な例といえる。

ラジオ講演会の記録からは、1927年の布告同様に、人口センサスの実施は文明国家になるために当然必要となる事業であるとされていることが

査時のアンカラの様子。初出不明。

(20) Ibid., pp. 252-253. 1935年10月21日の Vakit 紙より転載。

(21) トルコにおいて、ラジオ放送は1927年3月から段階的に開始された。1934年からは放送内容の決定は完全に政府出版局の管轄下に置かれ、1936年には国营放送化される (Yazgan (2006) pp.15-21)。当時のラジオ普及台数を鑑みれば (トルコにおけるラジオ販売台数は1940年に8万台、1946年の終わりには18万台に達する。)、ラジオ放送の大衆への影響は限定的であったと言わざるを得ないが、直接政府のコントロール下にあったラジオ放送の内容は、公式見解を探るうえで参考になる。

確認できる。また、調査の目的が徴税、徴兵とは関係がないこと、集められた情報については、使用後の破棄が法的に定められていること、事業はあくまで保健や教育といった分野において国民生活の向上を図るために行われることなどの強調が見て取れる。しかし、ここで注目されるのは、国民の協力を引き出すために語られる人口センサスの位置づけである。

(……) 人口センサスは非常に重大で権威ある国家の仕事である。戦時下に国家防衛に尽くすことが義務であるのと同様、人口センサス成功のために最大限の協力をするのは高潔な義務である。正しい結果を出すために、国家、トルコの科学、民衆自身に益するこの事業に意欲と熱狂を持って取り組もう⁽²²⁾。

人口センサスは国家防衛に尽くすことと同様、国民の「高潔な義務」であると表現されている。宣伝活動の中にはこのほかにも、「神聖な任務」「国民の義務」「容易な愛国行為」「国民の試験」等の類似の表現が見られる⁽²³⁾。外出禁止令による調査の強制力と並行して、調査への協力を促した宣伝活動からは、人口センサスが国民の義務感を刺激し、愛国意識を醸成させる場として認識されていたことが示唆される。

5. 国家認知と人口センサス：対外的機能と外国人専門家の役割

ここまで、人口センサスが人々を掌握し、「国民」として統合することに果たした役割について検討してきた。しかし、トルコにおける人口センサスにはもう一つ大きな特徴がある。それは調査そのものが持つ対外的な重要性である。前節で触れたように、宣伝活動のなかで人口センサスへの

(22) Başvekalet İstatistik Umum müdürlüğü (1941) p. 228.

(23) Ibid., p. 233, 239, 272, 214-215.

協力は国民の「高潔な義務」として位置づけられた。そこで引き合いに出されたのが、調査によって明らかになる人口数の多寡の外交的重要性と、帝国主義勢力の脅威である。

(……) 現在の外交においては、おそらく人口問題が何よりも重要である。多くの人口を抱え技術と科学を獲得した国家は、他国を言うがままに扱うことができる。人口が少なく後進的な国家の領土に目を留め、この国民に襲いかかる。日本、そしてイタリアの外交政治には、殊に人口を原因とした問題、必要性が影響している。(日本やイタリアの) 政策の実現もまた、かれらの人口状況、人口の多さによって可能になっている⁽²⁴⁾。

戦間期におけるトルコは、広大な国土にごく少数の国民を抱える自国に対する諸外国の領土的野心には非常に敏感であった。とりわけ、トルコに程近いエーゲ海のドデカネス諸島において軍備を増強し、エチオピアの占領など、あからさまな地中海膨張政策をとるイタリアの動向には大きな脅威を感じていたとされる⁽²⁵⁾。こうした国際的な状況下で、領土と人口を掌握し、なおかつ開示する作業である人口センサスは国内のみならず、対外的にも大きな役割を果たしていた。トルコのメディアにおいては、アナトリアに対するギリシャやイタリアの利権の主張に対抗するものとしての、人口センサスの重要性が論じられた⁽²⁶⁾。

(24) Ibid., p. 221.

(25) Zürcher (1993) pp.210-211. 新井 (2001) 228 頁

(26) Çakmak は統計局がイタリアやギリシャのメディアにおけるトルコのセンサスの扱われ方について関心を示していたことを指摘している。海外の報道に対する国内メディアの反応としては、1935年10月5日の Cumhuriyet 紙の「我々の正確な人口数が明らかになり、増加していることが分かれば、これが敵に対する返答になる。なぜなら、彼らは我々の人口が少なく、ま

そもそも、人口統計はオスマン帝国期以来、対外勢力との対峙の中で、領土的正統性を担保する外交的な道具としての側面を持っていた。とりわけ、露土戦争終結後に結ばれたベルリン条約により大規模なヨーロッパ領を喪失し、帝国の民族問題が新たな局面を迎えた1878年以降、宗教・宗派集団の規模を示す人口データは、重要性を増していった。さらに、1919年のパリ講和会議における領土獲得交渉のテーブルでは、各民族勢力が独自の人口統計データをもとに帝国内領域における権益を主張し、国家領域取り決めの根拠としての民族統計の重要性は決定的なものとなったのである⁽²⁷⁾。そこで求められたのは、統計先進国たる西欧列強に自らの統計データの説得性を示し、客観性に基づいたものとして承認させることであった。こうした歴史的な経緯は、トルコの人口センサス認識と統計制度のありかたに大きく影響した。

それが端的に現れているのが、中央統計局における外国人専門家の存在である。初代局長となったのは、元ベルギー内務省国家統計局局長カミーユ・ジャカールであった。2年間の在任期間の中で全国各地に視察に赴き、人口センサスや人口問題の重要性を説く講演会を精力的に行うなど、ジャカールはいわばトルコ統計局の「表の顔」であった⁽²⁸⁾。しかし、このベルギー人統計家の役割は、国内向けの啓蒙活動にとどまらなかった。むしろ、その存在感はトルコが信用に足る西欧基準の統計制度構築を行っていることを対外的にアピールするという点において発揮された。

すます減少しており、広大な領土が空っぽの状態であるとして、自国の領土に収まりきれない過剰な人口を定住させようと、帝国主義政策をとっているからだ。このいかさまの戦争、主張を黙らせるためにも、人口センサスが必要である。」との記事を示している。Çakmak (2009) pp. 91-99.

(27) Alexsandris (1999) pp. 97-98. Dündar (2008) pp. 97-98.

(28) BCA 30.10.25.145.19. 視察のためエルズルム、ギュムシュハネおよび近郊県訪問。BCA 30.10.24.134.8. イズミルにおける人口センサス準備の検討結果に関する講演。BCA 30.10.25.145.24. イスタンブルにおける人口センサスと人口問題に関する講演。

ジャカールは第一回人口センサス調査終了から6日目、仮集計結果が出た時点で、報道関係者への会見を行っている。会見の中では、初めての調査が非常に適切になされ、成功裏に終わったことがトルコ国民への称賛を交えながら語られた。注目されるのは、この時おおむね1400万人という結果がでることが予想されたトルコの人口数に対する西欧諸国の疑惑を牽制する発言である。

(……) 調査結果で明らかになった、あるいはこれから明らかになる数字を大きくするための加工は一切行われていない。結果は調査で得られた真実を偽りなく示したものである。この点に関しては、多くのヨーロッパの人々から意見や考えを聞いたので、特に言及する必要性を感じている。彼らは私に幾度も「明らかになった結果の刊行を(トルコ)政府は許可しないだろう。」といった。こういった発言をするのは、トルコの人口は1000万に満たないという人々であった。今、明らかになった結果は、一部の人にとっては驚きと落胆の原因になるだろう、そしておそらくこの人口数を間違いだという人が現れるだろう。このような主張は全くの誤りである。こうした事業の困難さから生じる小さな誤りをのぞけば、人口センサスの結果は正しい。この結果は最も熱心かつ高潔な形で集められたのである。この声明を出すことが誰に指示されたものでないことについても付け加えておく。こうした言葉を表明するにあたって、私は有効性と信頼性だけでなく、真実と正義にも仕えることを命じた職業的良心に従っている⁽²⁹⁾。

統計集にも収録されたこの会見の内容からは、当時の人口センサス調査実施に関するトルコの立場が透けて見える。トルコ政府は、データが政治的な目的で改竄されているのではないかと西欧諸国からの視線にさらさ

(29) Başvekalet İstatistik Umum Müdürlüğü (1929) pp. 120-121.

れていた。調査の不備や信頼性の低さを指摘されることに対しての防御的スタンスは、国外メディアや学術誌におけるトルコ統計局と人口センサスの評価が、中央統計局、外務省、首相府の間で共有されていることにも見て取れる。たとえば、ベルギーの新聞に掲載されたトルコにおける中央統計局発足についての記事の内容は外務省から⁽³⁰⁾、イギリス王立統計学会の学術誌に掲載された第一回人口センサスの評価についての報告は中央統計局から⁽³¹⁾、それぞれ首相府に報告されている。これらの評価は、ベルギー人統計家であるジャカールがその信頼性を担保する存在として語られているという点で共通している。こうした海外の評価が確認されることで、外国人専門家の存在がより重要視されていったのは間違いないだろう。

ジャカールは1929年にいったん中央統計局を離れており、1931年にそのまま故国ベルギーにて死去している⁽³²⁾。この間、トルコ政府は後任の外国人専門家を求めて奔走しており、国際統計学会にアンカラに招聘可能な専門家に関する照会を行っている⁽³³⁾。結局、アンカラからの招きに応じる適任者を見つけることができず、後任にはそれまで副局長を務めていたトルコ人統計家ジェラルール・アイバルが収まることになるが⁽³⁴⁾、中央統計局は第二回センサス実施約1年前に、アドバイザーとしてスウェーデン人の統計家カール・ブルシュヴァイラーを招いている。中央統計局刊行の『人口問題と人口センサスに関する考察』に納められている、ブルシュヴァイラーが残した第二回人口センサスについての記録には以下のような

(30) BCA.030.10.25.145.22. 1927年8月4日にベルギー紙Siecleに掲載された内容。

(31) BCA.030.10.24.135.3. Journal of the Royal Statistical Society (1929) vol. 92, no. 2, p 292の内容。

(32) BCA.030.10.239.614.6

(33) BCA.030.10.201.375.5

(34) アイバルは局長職を1947年まで続けており、共和国初期に行われたセンサスはこの人物の指導の下で実施されたことになる。17年の局長在職期間のなかで14の研究書と翻訳を手掛けている。

言及がある。

(……) 結果は 1618 万 8 千人であった。つまり 1927 年の人口より 260 万人多い。非常に大きな増加であるが、しかしこの増加の一部は 1927 年の人口調査が完全になされなかったことに起因している可能性がある。1620 万という数字は、予備調査から、一年前に私と中央統計局が首相に報告した数字とおおよそ一致している。結果が 1600～1650 万人になるだろうと報告した際、首相は微笑みながら「1550 万人もいれば喜ばしい」と言った。いくつかのドイツの雑誌と新聞が、人口センサスの適切性に関して、トルコの政治的な意図を含んでいると喧伝しているために、このような些末なことを繰り返さざるを得なくなった。政治的な意図が調査結果に影響するなど、試みられたことも、考えがよぎったこともない⁽³⁵⁾。

この記述からは、依然としてトルコの人口センサスを取り巻く国際社会の目が厳しいものであったことがわかる。人口センサス導入期における、統計機関の専門性や客観性をめぐる外国人専門家の「お墨付き」の強調は、とりわけ西欧における自国の人口センサスへの評価が意識されていたこと、つまり、人口センサスデータの持つ外交的な側面が重要視されていたことを裏打ちしていると言える。

6. 小括

トルコ共和国における人口センサスは、その周到な準備から統計集の刊行に至るまで、まさに国家の一大事業と呼ぶべきものであった。調査の実施にあたって、莫大な労力をかけて行われた通りと建築物のナンバリング

(35) Başvekalet İstatistik Umum Müdürlüğü (1941) p. 253.

は社会インフラの整備という点で重要な役割を果たし、得られた集計結果は、教育、保健の普及や、経済基盤安定化のための政策決定のベースとなった。行政の効率的運営や合理的な経済発展への影響など、人口センサスの実施にともなって、いわば間接的に派生するこうした側面は極めて重要である。

しかし、本稿で見てきた通り、トルコにおける人口センサス実施の直接的な目的は、新たに策定された国境内の人口を「国民」として数え直し、統合するということにあった。調査の実施にあたっては、オスマン帝国期に徴兵や徴税を目的に行われてきた人口調査の影響から、社会に根強く残っていた公的な人口調査への恐怖感や不信感が立ち上りだしたが、これに対してとられた方法が、交通機能の停止、さらには外出禁止令という力技であり、並行して機能したのが、調査協力を「国民の義務」として意識させるための宣伝活動であった。

大々的な宣伝活動のなかでは、西欧流の文明的国家を目指して国民が一丸となり前進することが語られ、帝国主義勢力の脅威を背景とした愛国的精神が人口センサスへの協力と関連づけられた。人口センサスは対内的には国威発揚の機能を発揮し、国民の連帯を醸成する場として利用され、調査への参加が「国民の義務」と位置づけられることにより、人々に国家構成員としての自覚を促すツールとして機能したのである。

他方、人口センサス事業の成功は国内のみならず、対外的にもきわめて重要な意味を持っていた。人口センサスは帝国主義勢力や領土を接する周辺諸国と対峙するなかで、トルコのプレゼンスを示すための外交的なメディアとしての役割を担った。トルコは中央統計局における外国人専門家の重用により、統計機関および収集データの信頼性を対外的に担保しようと試みた。なぜなら、布告や通達の内容から見てきた通り、自前の人口センサスの成功は、近代国家としての地歩を築くための資格付与のひとつであると捉えられていたからである。共和国誕生から間もない時期に行われた人口センサスは、こうした意味において、新生トルコの出発点として象徴

的な事業であったといえよう。

参考文献

- 新井政美 (2001) 『トルコ近現代史 イスラム国家から国民国家へ』 みすず書房
- アンダーソン, ベネディクト (2005) 『比較の亡霊——ナショナリズム・東南アジア・世界』 糟谷啓介他訳, 作品社
- (2007) 『定本 想像の共同体』 白石隆・白石さや訳, 書籍工房早山
- エルトゥールル, イルテル (2011) 『現代トルコの政治と経済 共和国の85年史 (1923~2008)』 佐原徹哉訳, 世界書院
- 加藤博 (2003) 「エジプトにおける「近代統計」と国民国家形成」『現代の中東』 34号
- (2013) 『ムハンマド・アリー 近代エジプトを築いた開明的君主』 山川出版社
- 鈴木董 (1993) 『イスラムの家からバベルの塔へ オスマン帝国における諸民族の統合と共存』 リプロポート
- フーコー, ミシェル (2006) 『フーコーコレクション6 生政治・統治』 小林康夫他編, 筑摩書房
- 安元稔 (編) (2007) 『近代統計制度の国際比較』 日本経済論評社
- Alexandris, Alexis (1999) “The Greek Census of Anatolia and Thrace (1910-1912): A Contribution to Ottoman Historical Demography” in Gondicas, Dimitri & Issawi, Charles (eds) *Ottoman Greek in the Age of Nationalism: Politics, Economy and Social Society in the Nineteenth Century*, Princeton, Darwin Press
- Appadurai, A (1993) “Numbers in the Colonial Imagination” in Breckenridge, C. A and van der Veer, P (eds) *Orientalism and the Postcolonial Predicament: Perspective on South Asia*, Philadelphia
- Behar, Cem (1996) *Osmanlı İmparatorluğunun ve Türkiye'nin Nüfusu 1500-1927*, Tarihi İstatistik Dizisi Cilt2, DİE
- Çağaptay, Soner (2009) *Türkiye'de İslam, Laiklik ve Milliyetçilik: Türk Kimdir?* (Trans) Bilcan, Özgür, İstanbul, İstanbul Bilgi Üniversitesi Yayınları
- Çakmak, Fevzi, (2009) “Cumhuriyet'in İlk Yıllarında Nüfusu Kayıt Altına Almaya Yönelik Girişmeler” in *Çağdaş Türkiye Tarihi Araştırma Dergisi* vol. 8

- Dündar, Fuat (1999) *Türkiye Nüfus Sayımlarında Azınlıklar*, İstanbul, Civiyaazları
- (2008) *Modern Türkiye'nin Şifresi*, İstanbul, İletişim
- Scott, James. C (1998) *Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*, New Heaven/London, Yale University Press
- Starr, Paul (1983) "The Sociology of Official Statistics" in Alonso & Starr (eds), *The Politics of Numbers*, New York, Russell Sage Foundation
- Tamer, Aytul, Bozbeyoğlu, Alanur Cavlin, (2004) "1927 Nüfus Sayımın Türkiye' de Ulus Devlet İnşasındaki Yeri: Basında Yansımalar" in *Nüfusbilim Dergisi* 26
- T. C. Başvekalet İstatistik Umum Müdürlüğü
(1929) *Umumi Nüfus Tahriri, 28 Tesrinevvel 1927* vol. 1~3
(1941) *Nüfus Meselesi ve Nüfus Sayımı hakkında Fikirler*
- Karpat, H. Kemal (1985) *Ottoman Population 1830-1914 Demographic and Social Characteristics*, The University of Wisconsin Press
- Kertzer, David & Arel, Dominique (2002) "Censuses, Identity Formation and the Struggle for Political Power" in Kertzer & Arel (eds) *Census and Identity: The Politics of Race, Ethnicity and Language in National Census*, Cambridge, Cambridge University Press
- Karal, Enver Ziya (1943) *Osmanlı İmparatorluğu'nda İlk Nüfus Sayımı*, Ankara, DİE Yayınları
- McCarthy, Justin (1983) *Muslim and Minorities: the Population of Ottoman Anatolia and the End of the Empire*, New York/London, New York University Press
- Yazgan, Teoman (2006) *Önce Radio Vardı: Bir Halk Üniversitesi Ankara Radyosu ve Diğerleri 1928-2005*, İstanbul, Tekin Yayınevi
- Zürcher, Erik. J (1993) *Turkey: A Modern History*, London/New York, I. B. Tauris